

信仰者、模範となる人々

兄弟、姉妹の皆様にとり祝福された金曜日でありますように！

私たちの主は、以下の章句において、こう告げておられます。「男の信者も女の信者も、互いに仲間である。かれらは正しいことをすすめ、邪悪を禁じる。また礼拝の務めを守り、定め喜びをなし、アッラーとその使徒に従う。これらの者に、アッラーは慈悲を与える。本当にアッラーは偉力ならびなく英明であられる」。ⁱ ある日、私たちの預言者(彼の上に祝福と平安あれ)は、彼の教友たちに、「あなた方のうち、誰が最も優れているか、また誰が最も悪しき者か、知らせておくべきではないか？」と問い、それから次のように語りました。「あなた方のうち、最も優れている者とは、人々から善良であると期待されている者であり、人々に害を及ぼすことのない者である。そして最も悪しき者とは、善良であるとは到底望めない者であり、人々に害を及ぼす者である」。ⁱⁱ

親愛なる兄弟、姉妹の皆様！

アッラーの使徒(彼の上に祝福と平安あれ)の言葉によれば、信仰者は何よりも従順かつ忠実であります。そうした信仰者の貴重さは、黄金にもまさります。ⁱⁱⁱ その人生を通して、イブラーヒームのあり方を示し、その尊厳を保ちます。ありとあらゆる状況において、自らの価値観と信念に基づいて立ち、そしてこう口にします。「インナーリッラーヒワインナーイライヒラージューン」、すなわち「私たちは皆アッラーの有(もの)、私たちの還り(かえり)つくところはアッラーにある」。そうした信仰者はクルアーンと、気高いスンナの導きを決して手放すことはせず、まっすぐな道から逸れることもないでしょう。

偉大なる預言者(彼の上に祝福と平安あれ)の言葉によれば、信仰者とはミツバチのようです。まるでミツバチのように、信仰者は善良で清潔な、ハラールなものを食べ、善良なものを生み

せん。^{iv} その心には善良さと有益さ、そして肯定的なもの以外のための場所はなく、悪しき有害なもの、否定的なものに入り込む餘(すき)は存在しません。

尊敬すべき信仰者の皆様！

信仰者の人生に、悲嘆(ひたん)や絶望のための場所はありません。信仰者は、「心配してはならない。アッラーはわたしたちと共におられる」^v という章句を、心から信じているのです。誰ひとりとして味方になる者もなく、何ひとつ持たなくとも、希望と救済を授けたもう守護者が自分の側(そば)にいることを知っているのです。

信仰者とは、その舌と手で他者を傷つけることがなく、よって人々が安心していられる人物のことです。^{vi} 「欺く(あざむく)ものは、私たちの仲間ではない」^{vii} とのハディースに従い、欺いたり欺かれたりといったことからの避難をアッラーに求めます。悪い言葉やにせものの言葉、侮辱的で心を傷つけるような表現が、信仰者の口から発せられることはないでしょう。信仰者は他者を排除せず、むしろ団結します。他者を憎むことはせず、むしろ吉報の運び手となります。(来たるべき審判の日)、自らのあらゆる行為と言葉について、申し開きをしなくてはならない時が訪れることを知っているのです。

尊敬すべき兄弟、姉妹の皆様！

信仰者は謙虚であります。「心の中に、辛子(からし)の種ひと粒ほどでもうぬぼれを持つ者が、楽園に入ることはないだろう」^{viii} というハディースを知っているからであります。創造主ゆえに、被造物を愛します。他者に対し友好的ではないがゆえに、周囲の人々もまた親しくできずにいるようなら、それは好ましい人物ではないということを知っているのです。^{ix} 信仰者の行為は慈しみと思いやり、誠実さと親切さ、そして愛情に包まれたものであります。

そして最後に、信仰者とは、素晴らしい香水を
売る薬種商(やくしゅしょう、薬売り)のよう
であります。^x人々に、倫理と道徳、美徳を差し出
します。人々の心の、良い場所に住まいます。
その声は、いつでも心地よいものとして思い出
されることでしょう。

ⁱ At-Tawbah, 9/71.

ⁱⁱ At Tirmidhi, Al Fitan, 76; Ahmed b. Hanbel, II, 268.

ⁱⁱⁱ Ahmed b. Hanbel, II, 199.

^{iv} Ahmed b. Hanbel, II, 199.

^v At-Tawbah, 9/40.

私たちの預言者(彼の上に祝福と平安あれ)の称
賛を得られたなら、それはどれほど幸福なこと
でありましょうか。

^{vi} Al Bukhari, Faith, 4

^{vii} Sahih Muslim, Faith, 164.

^{viii} Sahih Muslim, Faith, 147.

^{ix} Ahmed b. Hanbel, II, 400.

^x Taberânî, el-Mu'cemü'l-Kebir, XII, 319.